



災害備蓄用品の購入における環境配慮と管理の充実

～船山株式会社、株式会社匠美の取り組み～

災害備蓄用品のグリーン購入の促進と管理・利用の充実に向けた取り組みのポイントや課題について、GPN会員で防災資機材や防災備蓄品の専門卸売会社の船山株式会社、ならびに防災備蓄用の保存水の製造・販売を行う株式会社匠美にお話を伺いました。

■グリーン購入勉強会やカタログを通じた情報発信

社会全体の防災意識が高まる中で、災害用の備蓄食品に関しては高齢者や乳幼児、アレルギーを持つ方に配慮し安全・安心を重視したものなど、多様な製品の開発が進んでいます。その一方で、備蓄食品の賞味期限の経過による廃棄量の増加等が社会的に大きな問題となっており、災害用食品を購入する際の環境配慮の重要性が高まっています。

このような認識から、関係会社や取引先と共にグリーン購入の勉強会を実施するとともに、「防災・備蓄品販売カタログ」にグリーン購入について解説するページを設けるなど、環境の視点を重視した購入の促進に取り組んでいます。

同カタログでは、「食の安心・安全」と同様に求められる、「環境負荷の少ない商品を選ぶ」という意識」というタイトルでグリーン購入を解説しています。災害備蓄用品の環境配慮点として、賞味期限による買い替えサイクルの違い、パッケージに使用されている包材がリサイクル可能かどうか、原材料の調達・製造工程・物流で消費される電力や燃料などの事項を示し、グリーン購入のポイントや効果についてもわかりやすく紹介しています。

誰もが関わりを持つ災害備蓄用品のグリーン購入の実践に向けた情報を発信することにより、日常の業務や生活の中で環境負荷低減に取り組めることに気づく機会を提供しています。



船山株式会社におけるグリーン購入勉強会

■備蓄食品の循環システム整備の必要性

東日本大震災以降、東京都帰宅困難者対策条例の施行や行政と企業による備蓄品の協定の締結などを受け、災害に対する備えの充実が図られています。しかし、企業などによる食品等の備蓄が社会的な制度として運用されるようになってからまだ日が浅く、保存期限のある商品の入れ替えをはじめ災害備蓄用品の保管・利用に関しては、必ずしも十分な対応がなされておらず、取り組み事例も限られているのが現状です。

企業などが備蓄している食品が保存期限に達した場合、リサイクルルートを確認して再生処理するか、あるいは事業系の一般廃棄物として排出することになります。例えば、備蓄品のクラッカーについて、小麦製品のリサイクル施設が受入可能な場合、中身のクラッカーは有価物として家畜の飼料などにリサイクルされます。また、一般廃棄物として処理する場合には、包装と中身のクラッカーを分別し、地域のルールに従って排出することになります。

災害備蓄用の食品は、当該事由が発生しなければ基本的に消費されず、一定の時期に相当量が排出されるという性質を持っています。一方、排出時期を想定でき、同種の物品がまとめて排出されるケースが多いことから、こうした特性を踏まえ、資源循環の仕組みや環境負荷の少ない処理方法を検討することが求められています。

■「ランニングストック」の仕組みの構築

保存期限のある食品等の備蓄品を適切に管理し、廃棄等によるムダや環境負荷の発生を回避するためには、日頃から備蓄品の利用・補充を行う「ランニングストック」の仕組みを構築・運用することが重要になります。食品の場合、保存期間の8割が経過したら利用して必要な分を補充する、といったルールを設けることにより、災害時の備えをチェックするとともに廃棄処分を回避することができます。

大きな災害を経験した地域などでは、備蓄品を利用するイベントの企画・開催を通じて、災害用の食品をおいしく食べる方法などのノウハウの蓄積に努めていますが、全国を見渡すと、備蓄品の管理や利用に関する取り組みについては、地域によって大きな差があるように思われます。

実際に備蓄品を使うことにより、味や食感、食べ方などを体験し、災害発生時を想定した訓練を行う機会になり、また、備蓄に関する課題を把握し改善につなげていくことができます。こうした取り組みを通じて、防災対策の充実と同時に環境負荷の低減を図っていくことが望まれます。